
国家主導非人道的実験

凧竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国家主導非人道的実験

【Nコード】

N7338E

【作者名】

風竜

【あらすじ】

何も変わらない習慣、ただ過ぎていく日常。一介のフリーター神城空はそれで満足していた。しかし某国の“カンパニー”主導で行われている人道を完全に無視した“実験”のモルモットに選ばれており、自らの人格、権利、尊厳を踏みにじられながら過酷な運命に翻弄されていく・・・10/23蜘蛛の復讐が完結したのでデッド・ラインと合わせて復活しました！

ブローグ

??時??分?????

――暗闇に包まれた一室

その部屋には円形のテーブル上に設置してあるプロジェクターを通して青白い姿を投影された、人型達のホログラムが議論を繰り広げていた

実際にこの部屋に居る立体映像ではない人間は、機械の準備を行つた一人だけであり、その本人は部屋の片隅に突つ立つたまま、立体映像達の会話を見守っている

青白く光る男達は事情を知らない一般人にとってみれば、意味不明ともいえるが、関係者達が聞けば卒倒するような事実の応酬を繰り広げていた

「現段階の計画進行率は58%。予定よりあまり進んでおりません」

「監視対象03の行動は、予想を13%ほど逸脱しております。これは辛うじて隠蔽できておりますが、これ以上イレギュラーが発生しますと情報操作にも支障をきたします」

「やはり、“カンパニー”の幹部連中共にこちらの弱みを握られ過ぎて無理難題を押し付けられていたのが仇となりましたな」

「あなたが酒の席で、不用意に機密をべらべら喋り過ぎたのも問題をややこしくしている一因なのでは？」

「奴らの本社が存在する本国は人口も国土面積も科学技術すらこちらの遙か上の水準に達していますのに、こつも厄介事ばかり押し付けられてはどうも致しかねますね」

「便座上奴らの国とは同盟関係にありますからな、“カンパニー”のバックにあの国が有する軍隊が付いてるのも厄介ですが、ここで媚を売るのも悪くありますまい」

「しかしですな、、我が国で“実験”を行うのは一向に構わないのですが。こつも結果ばかり追究され“実験”を強行するあまり、やりすぎますと右翼まがいの連中に嗅ぎ付けられた挙げ句、厄介な事になりますぞ」

「まあ、彼等は彼等なりの思想、理由に基づいて存在するのですようがね、ただのテロリスト風情が亡国の勇士を気取るのは辞めて貰いたいモノです」

「私は大いに賛成ですぞ。メディアを駆使して国民の印象操作を行う事も出来ますし、“実験”を我が国にて行う事により、“カンパニー”の連中に恩も売れます故・・・更に、多すぎる人口の調整も出来ます」

「実に微々たる数ですが」

「巻き込まれるのは我々ではありませんからね」

その言葉が発せられた後、どっと室内の空気が沸き闇の中に点在する複数のスピーカー越しからのくぐもった笑い声で満たされる

その種類も部屋の人数に応じて、実にバリエーションに富んでいた

軽く失笑を浮かべる者

笑いを必至に噛み殺している者

あからさまに隠そうともせず爆笑している者

果たしてこの光景を第三者

例えるならば、この国の国民がテレビに映るものとは違った顔を見せる

余りにも自分達に対して笑い事では済まされない、不謹慎過ぎるブラックジョークを肴に笑う彼らの姿を、仮に目にしたとなれば

彼らがよく知ったテレビに映る政治家達と比べ見た時、どんな表情を浮かべるのだろうか？

会談を静かに見守るだけだった彼は、ふとそんな事を気にしていた

一 目 目 0 1 (前 書 き)

結構前の文章を手直したただけなので、読みにくいかも

一日目 01

7月23日6時30分アパート・神城空^{かみしろくう}の部屋

ちりりりりりーん

いかにも軽薄を音にしたかのような、目覚まし時計が奏でるアラームで空は目を覚ました

まだ意識は眠気の誘惑に従い、二度寝を推奨してくるが、それを強制的に叩き起こし彼はベッドから起き上がる

ふと、時計を見てみると針は6時30分を指している

近所の駅から出る電車で20分で着く隣のスーパーでのバイトが始まるのは9時

朝飯と昼の弁当をこしらえるには時間は充分だった

尤も、目覚ましの合図と共に意識が目覚めるのはさほど無いことだ。いつも通りならばアラームがなり終わる寸前か、いざという時の保険に設定した携帯のバイブで起こされるのだ
まあ、それはプラスに考えるべきなのだろう

いつもより炊事にかけられる時間が増えたのだから、早起きした自分への褒美もかねて今朝はそれなりに豪華なものを作ろう

と、その前に顔を洗わないとな

そこまで思考が進んだ所で洗面所へ向かう

鏡を覗きこむと僅かに無精髭をはやした自分の顔が見えた

（髭って伸びるの早いな、つか毎日剃るのが面倒くさい）

充電式の電動髭剃機を顎にあて、不器用な仕草で無精髭の生やした顎を往復させると、ようやく出勤前の支度が整った自分の顔が拝めた

これで支度はよしと。いや、肝心の歯磨きを忘れていたをだっけ

空は自分の間抜け具合に苦笑してから二、三分程で用事を済ませると、朝食とバイトの弁当を作り台所へ向かった

毎朝の習慣で台所前の居間に置いてあるテレビの電源を入れる

早速淡々と昨日の出来事を告げるキャスターが画面に表示された

「 です。次に、昨日〇〇市にて死傷者6人が出てしまった連続通り魔事件の続報をお伝えします 」

こういったニュースを耳にするたびに空は胸が苦しくなる

どうしてこんなに悪い事をする奴が出てくるのだろうか？

人様に迷惑を掛ける輩は自分達のしている所業を愚かだとは思わないのか？

自分の親や大切な人達、被害者達の気持ち解らないのだろうか？

幼い頃から考えてきた微かな疑問

両親に訊いても曖昧にはぐらかされる、それか何処にでも転がっているような模範的な理屈ばかりで納得のいく回答が得られなかった己の胸に未だ在り続けている明確な答えが出されていない問題

おっと、また考え事に耽っちまった

これじゃあ何時までたっても朝飯が作れないな

「犯人は警官隊により確保されましたが、錯乱しており奇声や拘束を逃れようと暴れるばかりで、現在動機の説明が困難な状態にあります。警察は犯人が落ち着くのを

未だに続くニュースキャスターの声を耳から完全にシャットアウトし、俺は台所に入った

そして30分後

「いやあゝ我ながらなかなかの出来映えですなあゝ」

ニュースをみた後の暗い気分を吹き飛ばして朝食を作った空の第一声は、予想に反して美味そうに仕上がった己の料理（失敗作？）に対する賛辞だった

「朝からあまり腹に溜まるものは食いたく無いんだけど、ま、いいか」

そう言つて自称最高傑作である昨日の残り物で作つた天ぷらを市販のそうめんの汁に浸し、炊飯器の予約機能を使って炊いたホカホカのご飯に乗せ、頬張る

「うゝむ。旨いっ！」

つゆが滴つた肉入りの天ぷらがふわふわで、炊きたての米と奏でるハーモニーは実にデリシヤスな感じで空の口の中に広彼に至福の時をもたらした

「残り物の失敗作チンジャオロースを天ぷらにするのは逆転の発想かつ、なかなかの冒険だったが、まさかここまで美味しいとは！」

次はラーメンを揚げてみよう。と密かに野望を決意する

弁当の中には、これやミートボール、チキンナゲットそしてメインデッシュのご飯が入っていることを考えれば、昼飯の時間が朝食時より楽しみになるのは至極当然必至である

そこでふと我に帰つて時計を見ると始電の十五分前を指していた。

家からでも全力で走れば間に合う距離ではある

やべ、浮かれすぎた

早く行かねえと遅刻になつちまう

早起きしたのに結局出るのは何時通り、ギリギリの時刻になつてしまった

何時もと変わらない普通の日常

その日常とやらがあんなにも簡単に崩れてしまうなんてことは

今の空には予想すら出来なかった

一 目 目 0 2 (前 書 き)

パソコンが欲しいなあ

一日目02

7月23日8時58分：空のバイト先のスーパー

「・・・間に合った」

先に結論からいうと空はバイトに間に合った

早起きしたはよかったものの、朝食の件で浮かれはしゃぎ過ぎたお陰で、何時も通り遅刻間際でバイト先に滑りこむことになり、務め先のスーパーの店長に劳い（殺意の）籠もった視線を浴びせられたのだが、ギリギリ始業時間前に来れたので其処は不問となった

しかし、その後店長に

「もう少し早く来てね空くん。じゃないと次はクビかも、ね」

とすごい鬼気の迫った笑顔とセットになった説教を食らってしまったので次回からはそれなりに気を付ける事にしようと決意した空であった

そして彼は今メインのレジ打ちの仕事に取りかかる前に10時の開

店に備えて、店頭に並べる商品の整理に追われていた

デリケートな発砲スチロールに梱包された惣菜を棚に並べたり、肉売り場の商品を冷凍庫から引っ張り出して惣菜同様に並べたりするなど忙しかった

（くそつ、毎度ながらこのバイトは忙しいなア

こんな事になるのならば都会に出てフリーターにならずに何処かの会社に勤め正社員になるか、地元で大学又は専門学校に通って親のスネをかじりながらもう少し楽を、、やいや
将来的に他の道を模索する道を選べば良かった

流石にニートなんてだらしのない者にはなれんからね）

こんな事を考えている内にあつという間に店は開店

レジ打ちに仕事をシフトチェンジした空は、今夜のメニューや昨夜放送されたお笑い番組に付いて考えながら仕事をこなしているとあつという間に12時半の休憩の時間のチャイムが鳴った

パートの人間ばかり居る休憩所（仲は悪くないのだが）で飯を食いたくなかった空はいつもスーパールの近くにある茶々丸という変な名前の喫茶店で食事を取っている

そのマスターは気の良い中年の、と言うよりは、ダンディー膳とした影を持った大人の男という風情な感じで、空も此処に上がって職を探していた当初はよく世話になり、マスター特製コーヒ―牛乳をご馳走してもらっていた

「ちわーす」

ドアから店に入るとコーヒー豆の香ばしい匂いが空の鼻をくすぐるクラシックという単語がイメージ通り様になっているバーの奥では、丁寧にガラスのコップを磨いているマスターがいた

「よう空、バイトお疲れさん。今日もここで弁当食うのかい？」

「そうっす、今日もお邪魔、」

マスターが前に居る席に座ろうとすると、ちょうど今、テレビで放送していたニュースに俺は完全に目を奪われた

「……では、次のニュースです。」

今世間を騒がせている多発的連続通り魔殺人事件ですが、今度は〇〇県〇〇市にて合計8人の変死体が山本商事裏のビルにて発見されました。情報によれば遺体の損壊部分は激しく、所々で欠損部分があるようです。警察は猟奇的犯罪の線で捜査を進める方針で……」

最近世間で話題に上がり、多局でニュースになる頻度もかなり高い同時発生通り魔事件だ

発端となった最初の事件が発生したのは半年前で被害者は今より少ない二人程だったのだが、

その内一人の遺体は体が所々欠損していたらしい

そんな感じでニュースで勿論知り得ない情報がある友人（と言うより悪友）先程と同じく変死体と放送されていたが事実以上にネット上掲示板などの噂で聞くような情報にまで踏み込んでいた

それによれば通り魔に遺体を喰われたただの、犯人は悪魔の儀式を行っていたのだ、悪魔が取り憑いていた等の事が面白半分に囁かれていた

空個人としてはそのような噂を鵜呑みにしなかったものの、今まで生きてきた中でこの事件がどれだけ異質であるかを彼なりに感じ取ってはいた

この事件は邪悪かつ醜悪な企みによって齎された物であると

そして空の悪友も同じ様なことを言っていた

しかしいくら同じような事件が過去にあったとしても同時期にこれほどまでに不気味な犯人が多数存在して同時期に通り魔事件を起こすなんてことは非常に考え辛い

同じ時間にて散発的に行われる犯行自体は以前悪友と共に個人的な興味で調べていたアメリカの同時多発テロに似てはいるが、あの事件とは異なり、この通り魔事件は半年前を皮切りに長期に渡って先程の殺人事件に酷似した犯行が各地で所々続いている

まさか有り得ないとは思うが、こうも不透明で先の見えない事件はネットで囁かれていた悪魔が蘇って取り憑かれた人間が凶行を行っているという説も奇妙な真実味を浴びてきてしまう

しかしそれ以上に腑に落ちない点は犯人の動機だ
俺は悪魔説を受け入れた訳ではないが、何故か、今までの事件に潜む黒幕が存在するかもしれないと疑っていたのだ

根拠はないし、陰謀説もマスコミやネットで言われている事もあつ

た、それにこれは事件の傾向も考慮にいった上で半分くらい空本人の直感も入っている

しかしながら騒がれている話はやっぱり事件を楽しんでいる連中が下手なSFや映画を元にしたジョークに当てはめて笑い話にしているだけで確実な根拠が在るわけでもない

不気味で黒幕を赦せない事件だと思いつつも、空も事件を楽しんでいるという点では、やはり世間の連中と変わらないと言っただけの話だそこでふと、空はマスターに尋ねた

「マスターは、この事件の事をどう思います？」

「妙な事件だと思う。少なくとも私が今まで生きてきた中でこれほど奇妙な事件は知らないよ」

そう答え、言葉を続ける

「犯行の異常さについては何か不気味な組織めいたものがバックに居るのではないかと感じている」

なるほど、論点は空とそれ程変わらない

「そこは俺と同じ意見ですね」

マスターは再び話す

「だがやはり、この同時多発連続通り魔事件に関して言えるのは、個人の欲望なんかより巨大な無機質な意思が介入している点だと思

うよ

犯人の経歴は至ってバラバラで共通点が見えないし、容疑者の全員が全員そうではないかもしれんが、犯行を起こすような人格の持ち主は極めて少ない」

そこでマスターはいつ用意したのか、コーヒ―牛乳の入ったガラスコップを空の眼前に滑り込む

その時のマスターの動作が洋画で主人公に注文した酒を渡す際にバーの奥から細長いテーブルを伝って中身の入ったグラスを主人公の前へと滑り込ませる動作にそっくりだったために、今は見慣れたとはいえ、空は初見の際にびっくりしたものだ

勿論マスターから空への奢りである

空が礼を言ってそれを飲み干すまで待った後に言葉を続ける

「それに犯行の共通した特徴――逮捕いや、中には行方不明になったものも居るらしいが全員が錯乱しているような事を言っている」

「さあ？殺人犯なんてみんな頭おかしいことばかり考えているんじゃないですか？」

「さてな、それについては私でもよく知らん。知りたければ専門書でも読むか、キミの好きなネットから真実を探り出すのだな」

「流石に其処までしたくないですよ、、、」

げんなりとしながら答える空を無視して続けるマスター

「それに時点の共通点であり重要な情報でもある被害者の死体状況だ。テレビなんかのマスメディアでは変死体としか発表してないが、君との会話の話題になると思えば少し調べみたのだ。しかし、驚くべき事が判った」俺は気になって聴いてみた

「判った事って一体何なんです？」

マスターは静かな表情を作った後、静かに答えた

「体のあちこちが欠損していたという死体には、何者かに食い破られた跡があったそうだが、当然の事ながら野犬やカラスの仕業ではない、人間がやったのかと言われてもまるで違う。そう、それはまるで、」

空は弁当を食する手を休め、重要な事実を聞き逃さんとマスターの声に静かに意識を傾ける

「人間に極めて近く、それでいてかなり身体能力を誇り、これまでに全く確認のなされていない未知の生物の痕跡だったらしい」

「何ですって？」

意外過ぎる事実には空は思わず立ち上がっていた

一日目03（前書き）

今回の話から完全書き下ろしになります
更新遅れてすみませんでしたm（| |）m
話はあまり進みませんがお楽しみ下さい

一日目03

7月23日19時52分 マンション内 193号室（空の部屋）

空は帰宅すると同時にすぐに冷蔵庫を開け水色のラベルが巻かれたブレンディの500ミリリットルペットボトルと冷えたコップを取り出した

キッチンの木製テーブルにコップを置きボトルの冷えた中身を注ぎ込む

暗い褐色の液体がコップの中身を半分少し位満たすとそれを空は口元に持っていき一気に嚥下した

ごくろ、ごくろと喉を冷えたコーヒーが流れていく度に、熱くなっていた思考が冷やされ、少しずつだが徐々に冷静さが戻っていくのを彼は自覚する

心身共に静まった事を悟るとコップとペットボトルをその場に放置し、すぐにパソコンの置いてある自室に急いだ

部屋の電灯を点けるのも忘れ、彼はディスプレイのスイッチと本体の電源を入れる

暗い画面はすぐに青一色の空白に変わり、中心には小さな白地で【起動中】の文字と砂時計を模した小さなアイコンが表示された

ものの五秒も経たない内に画面は切り替わり緑一色の森林を背景に

したデスクトップと彼が普段使用する幾つかの機能を表示したアイコンが出現する

彼は焦る気持ちを抑えてマウスを操作してメール作成画面に切り替えすぐさまキーボードを叩いて文面を作成した

こんな事を宗に相談するのは高校在学中に一緒に調べた十年前に発生した隕石落下事件以来の事だった

『 宗

例の連続通り魔の事だが知り合いのマスターから情報が入ったすぐに返信頼む』

そして矢印のアイコンで【送信】をクリックし、メールを送信

すぐに宗から返信は来ないだろうから今の内に自分はやれることをやっておく

調べ作業は宗の方が自分より遙かに詳しいはずではあるが、無駄にはならないと信じたい

メール送信後はすぐに画面を閉じ、インターネットに接続する

連続通り魔事件をキーワードに入力し検索

すぐに沢山の記事がヒットし、表示された

しかし、そこにあるのはニュース番組のサイトやそれに準じた掲示板ばかり

試しに先頭の三十件くらい覗いていたもののマスターがもたらしてくれたような詳しい情報は掲載されていなかった

空はむう、と呻いた

マスターの情報の出どころも非常に気になるところではあるがこうも検索に引っかからないのでは話をしてくれた彼に悪いのだが、ガセネタではないのかと疑ってしまう

少し目がチカチカしてきた空はパソコンの上に飾ってある灰色の塗装すら施されていないF 15イーグルのプラモを見上げた

これは宗が大学の多忙で処理しきれない積みプラモデルを彼にくれたもので少し古いスナップフィットで組み上げる物ではなく接着剤でパーツをくつつけるタイプの昔に流行ったキットで組み立てる際はパーツがよく外れた為に散々時間をかけた気がする

塗装もしていないデカールを張っただけの簡単な素組み仕上げだがシャープなフォルムが意外と気に入ったので、こうして今でも飾っているのだ

宗によるとこの機体はアメリカやイスラエル、サウジアラビア、そして自衛隊も使用している旧式だが未だに現役の戦闘機らしい

その時は宗の意外な知識に適当な相槌で答えたのだが、知り合って随分経つ今から考えても彼の多芸多趣味ぶりには未だに驚かされるばかりだった

空自体も自衛隊の戦闘機なんてテレビで映ったとしても、とくに感心すら抱かなかったのに

イーグルを手に取り思い出に耽っているとイーグルの横に置いてあった時計が目に入る

時刻は空がインターネットで検索を初めてからそろそろ一時間が経とうとしていた

（そういえば、宗からのメールは既に届いているはずだ）

案の定PCをデスクトップに戻すと画面にはメールが知らせることを知らせる表示がある

予想通りと言うか、メールを送信した以上、返信が来るのは当然なのだが送り主は宗とある

さっそく空は送られて着たばかりのメールを開いた

『 空

悪い。気付くのに割と時間がかかった。俺もサークルやレポートで忙しいからな

高校の先生が大学は暇だとか言ってたのになんでこんなに忙しいんだ？

これって詐欺だよな

空は胸に溜まりに溜まっていた溜め息を吐いた

（愚痴かよ！）

心の中で宗へのツツコミを入れる

まだメールは続いていた

空はモチベーションの低下を自覚しながらも続きを読む

悪い、なんか下らねー事をグダグダ書いてた

んじゃ本題だ

一体そのマスターとやらからどんな情報を得たんだ？

お前焦ってたらしくて肝心な事実を書いてないぞ

メールじゃ返答が遅れるから俺から電話しようか？

そっちの方がスムーズに話が進むだろうし」

空はなるほど、といった風に左手を自分の顎に沿えて頷き、メールの返信を打ち込んだ

『 宗

わかった

でも電話は俺から掛けさせてくれ

お前はバイトで学校行ってるんだろ？

だったらこんな事で無駄な金を使わないで俺に頼れよ』

送信する

そしてものの、二分も待つと宗から『了解』とだけ記されたメールが返ってきた

空はケータイを充電器から取り出し、久しぶりに話す親友の番号を電話帳から選択し電話をかけた

一日目 04

いつもは電話に出るのが何故か遅い宗にしては意外というか、空と話すために前もって用意していたのか判らないが彼はすぐ出た

「久しぶりだな、宗」

「俺もだ、空。」

こうして話をするのも一年ぶりだが」

空は苦笑した

確かに、久しぶりの会話だった

メールではニュースや珍しい事件について散々議論を交わしているのに電話越しとは言え、直接宗と対話するのは一年ぶりの事だった

実際、空は不思議なものを感じていた

宗とは全く連絡を取り合っていないわけでも無いのに、宗の肉声を聞くと思議な懐かしさが胸の中に満ちていくような気がする

「俺がお前に電話するなんて、姉貴にお前が告って玉碎した時以来だよな」

「止める。マジであの時の話題は出すな
今でも傷ついてるんだからな、お前のせいで」

「悪い。あの時は少し悪ふざけも入ってた」

僅かに音量が下がった宗の声に慌てて空は答える

「いいさ。今ではいい笑い話だからさ

それに、あの時はお前にかなり助けて貰ったからな
いいさ。今の失言は許してやる

ただしいつかゲーセン行くととき奢れよな」

「ちよっ！待て

親愛なる友人である空様は高い学費をバイト台で賄っている俺にそんなことさせるのか？」

空は少しばかり言い過ぎたとばかりに目を閉じた

「冗談。からかってみただけだ」

「別にいいよ。さっきのは少し不謹慎だったからな」

空は過去の出来事を思い出していた

宗の姉でボーイッシュな活気溢れる礼子の事

昔に自分が足をすりむいた際に手当てをしてくれたこと

宗の家に行くのが彼女を見る目的という不純な動機であり、その時に変わり者の弟である宗と仲良くなったこと

そして高校一年生の時に悪ふざけで飲んだ酒の勢いで礼子に告白して降られた苦い思い出

それらの記憶を反芻し、彼は数秒間だけ蛍光灯の光が照らす白い天井を仰ぎ見る

その様子から察するに彼は宗の姉である礼子の事を未だ気にしているのだろう

それとも過去の失恋を思い出し、感傷に浸っているのだろうか？

それは空自信にもわからない事だったがいずれは決別しないといかない事実だと彼は思った

「まあいい。じゃあ連続通り魔について俺が得た情報を話すぞ」

「おけ。」

彼はすぐに気分を入れ替えると、マスターから聞いた奇妙な話と、自分なりに予測した推理を交えて宗に伝えた

謎の連続通り魔殺人事件は全国でここ何年の間、散発的に発生していること

マスコミによってニュースで報道されている情報は公開されていない情報が潜んでいること

情報操作の可能性を考慮して見ると、何らかの組織が圧力をかけている可能性があること

そして…

「これは俺も初めて聞いたとき嘘だと思ったけど一応言っておく
通り魔の犯人は実は人間じゃない別の生き物だっという事を聞いたんだ」

電話越しに重苦しい間が発生する

恐らくは宗も驚くべき事実をすぐには受け入れられずに混乱した頭の中を整理している、と空は考えた

宗はこんな時に限って頭の回転が早い
すぐに返答を寄越してくれるだろう

空は前の隕石落下事件の時も宗を頼りにしていた

結局の所、得られた情報から推測できる事が少なかった事と宗や空自身の飽きもあつたので中断したつきり中途半端な情報がHB鉛筆で殴り書きしてあるとてもレポートと言えない文章の落書きがページの半分以上を埋め尽くしたノートは空の部屋のどこかに放置してある持つてくるつもりは無かつたのだが引越の荷物に紛れ込んでいたらしい

確か事の始まりはこれだけの大事件に反比例してマスコミがニュースで流した情報があまりにも少なすぎる事実には不満を持った宗が独自に研究しようといった感じで、空がそれに便乗したものだったがいくら調べたにもかかわらず情報は殆ど入らなかった

宗が得意としているネットサーフィンを用いた情報収集ですらガセネタの域を出ないだれかの妄想まがい情報だったからだ
一、二ヶ月経った頃になると空は既に事件への興味を無くし、熱心に調べていたはずの宗もマスコミが明かさない情報と憶測の域を出ない噂を収集する作業に疲れ、作業を断念した

つまりは今回の場合そのリベンジとなるわけだ
それに前回に比べて有力な情報もある程度は自由に使える時間と力
ネもある

それは前回成し遂げられなかったものに対する残り火であり、退屈な日常を少しでも楽しくする娯楽でもあり、宙ぶらりんな毎日を送る今の自分に対しての挑戦状でもあったのかもしれない

「ふーん

で、そのマスターって人はそんな事を話してたのか」

「信じられないけどな」

「けどな、通り魔事件は俺も少し調べてただけだな」

「えっ！」

意外な宗の反応に空は微かに驚く、宗は大学が忙しく学業に追われててそんな暇も無いと踏んでいたからだ

「だからさ、俺もお前が話した事は信じがたい。もしかしたらマスターって人がお前をからかおうとして嘘をついた可能性もあるだろ」

空は言葉に詰まった

「それは…」

宗が言う

「俺は自分で見たもの以外は信じない主義なんだ。だから他人のフィルターにかけたマスコミの情報は信用しないしネット掲示板の噂も参考程度に留めて鵜呑みにはしない俺は真実が欲しいんだよ」

空はまた宗の野次馬演説が始まった
とうんざりした

正直に述べるならばこうなった時の宗は手に負えない事を重々承知
しており少し鬱陶しい部分もあるのだが、宗の真っ直ぐした性根は
嫌いではなかった

「なら、どうするんだ？」

「決まってるだろ

そのマスターって奴に直接話を聞く
で、案内頼むぞ

明日大学サボって来るからそちらも何とかしてくれ」

「お、おい
ちょっと待…」

ガシャン

ツ―

ツ―

ツ―

何故だろうと空は思う

こうまで強引な奴なのに何故か嫌いにはなれない
しかし不快を感じていたのならばここまで友人関係は継続しなかつ
たろう

宗は基本的にウソはつかない、それに意外と氣を利かすので自分のバイトが終わる直後の時間にマンション前で待ち構えるのだらうと、明日の夕方の未来を空は容易に予想できた

だが悪い氣はしない

むしろ、胸が躍った

さて、明日に備えて準備するかな

デスクパソコンの上に飾ってあるイーグルのプラモを見て、空は軽く苦笑していた

一日目05（前書き）

ようやく一日目終了

てか今ノートに書いてる小説の方が進んでるって事は…

一日目 05

7月23日23時06分某所

「また見つかった」

此処は空の住む街より北東にある人里離れた場所である

そこには道端に無造作に捨てられた喉を喰いちぎられ、そこで立ち尽くし、体の所々に欠損部が目立つ死体を眺めている黒ずくめの女は傍らに立つ黒ずくめ大男の隣でぽつりと呟いていた

この辺りは、ぽつぽつと木造の民家と通常の住宅が建ち、青々とした広大な田んぼが幅を利かせている

町というには人氣が無く村と呼ぶにはアスファルトで舗装された道路が目立ちすぎる。

更には夜まで近くの工場が深夜近い今でも稼働しており、中途半端な農村とも呼べた

生まれつき文明圏に住を構え、そこから一步も足を踏み出した経験が皆無な都会の人間からすると、辺境とも呼べるこの地では明らかに黒いコートを羽織った一組の男女はあまりにも異質かつ場違い過ぎた

女は一言で説明すれば間違いなく美人に類する顔立ちである

キリリと真っ直ぐ引き締まった眉、薄くても形の良い紅唇、少しキツそうな目つきはそれでいて強い意志を感じさせる輝きを放ち、う

なじの少し上辺りでくくったポニーテールは腰の辺りまである絹のように艶やかでまっすぐ伸びた黒髪とセットで彼女の凛としながらも儚げな印象を他人に与えるのに一役買っている

夏の夜だとは言え、足元までの長さを誇る動きにくそうな黒いコートを着こなしたその体はくつきりとグラマラスなラインを描き、凛とした彼女の雰囲気と調和しつつ、さながら夜の女神といった荘厳さを演出していた

男の方はまさしく彼女とは対になるといった風情であった

彫りの深い顔、経験を積んだ歴戦の軍人という感じの落ち着いた雰囲気、血肉に飢えた狼すらも尻尾を巻いて逃げ出しそうな程に鋭く冷たい眼光、キツチリと無造作に切られた短髪、そして特筆すべきは二メートル近いその身長

身長の高さに比例して彼が羽織っている巨大なコートは女のそれとは違いあちこちにゴツゴツとしたラインが浮き出ている

何がコートの下に収まっているのか？

コートの下にゴツゴツ収まっている“モノ”の正体は一体何なのか？

平和ボケし過ぎたこの国の国民が好奇心から安易にその問いを発するには躊躇われる位の危険な雰囲気はこの男は自らの周囲に侍らせていた

「これで、三十人目か」

男が感情をあまり表に出さないながらもはつきりと聞こえるような口調で言う

「どうやら“感染”はしてないみたいね
喉を喰いちぎられた後を調べてみたけど、傷口に“因子”は殆ど残っていないみたい

“感染”させる目的で咬んだんじゃないわ

言うならば腹が減ったからつまみ食いした感じ」

男は訝しげに眉を顰めた

「要するにまだ連中による制御が行き届いている。と言うわけだな」

「そうね、それもいつ“暴走”を引き起こすか判らない
仮に“進化”してしまったら“アイツ”でも制御が困難になる」

「それなのにこんな田舎で犠牲者が見つかるとは連中は相当遊んでいるか、実験のデータ採集の目的か」

「あのバカが関わっているなら両方あり得る話だわ
だってアイツは人間を憎んでいるからなるべくなぶってやらないと気が済まないのかもね」

男は問う

「お前も昔は恨んでいたんじゃないのか」

女はまっすぐと形の整った眉をひそめて答える

「昔の事よ、昔の。」

それに、私がまだあのバカと一緒に“先生”の考えに賛同してたら
きっと似たような事をしでかしたと思うわ」

そうか、と言だけ男は相槌を打つ

女は言葉を続ける

「その私達を育ててくれた先生も今は居ないし、あのバカが独りで
はしゃいで騒いでるだけだから、アイツをどうにかして“実験”の
データも全て消去すれば全部丸く収まるわ…多分」

彼女はそうは言ったものの言葉とは裏腹に台詞の後半は声が小さく
なっていた

「そうだな。では早く行動するぞ」

「了解」

二人は死体をそこに残して近くに戦闘が起こった際にすぐに盾に出
来る位置に止めてあったワゴン車に向けて歩を向けた

女は車に乗り込む前に置き去りになる死体に一瞥し

「ごめんね」

と小さく謝罪の意を示した

車に乗り込んだ二人はそれぞれ男が運転席女が助手席に座る、無論二人ともシートベルトなどは着用していない

これから起こる事態を前にして交通事故といった些事など気にしている場合ではないからである

それ以前に“敵”が襲撃してくる可能性が僅かでも存在する以上は常時に戦闘時に備えて身を束縛する行為はなるべく避けておきたい理由も兼ねている

「メンバーはもう向こうに着いているのだろう」

「なんの不都合も障害も無ければ。ただどね」

「そうか、だが何が起きても俺達はやり遂げなければならない」

俺とお前の因縁に決着を付けるためにもな

男はそれをあえていわなかったが隣の相棒は口に出さなかった彼の言葉を汲み取ったかのように軽く頷く程度で応えた

男がキーを回してエンジンを始動させる

駆動音が夜の暗闇に響きわたると共に、車はすぐ空の住む街へと走り出した

彼らが去った夜天の中、雲の間に姿を見せる満月だけが残された死体を見守っていた

そして一日目は終わる

バラ時かれた不穩の種を内包しつつ

そして、それが発芽したときに人々の運命を巻き込んだ混乱が生まれるだろうことは想像に難くなかった

間章 1

この建物は何かの研究所らしかった

照明が暗く判別が付きにくいなのは確かだが大型トラック二台分くらい幅を誇る通路両脇にズラリと規則正しく円柱状のガラス槽が多数並ぶ様はなかなか壮観でありそうそうお目にかかれる光景では無いだろう

そのガラス槽を満たす溶液の中に何かが入っている

ここの薄暗いフロアでは判別が付きにくいがシルエットを一見すると体を丸めた猿の標本が浮かんでいるかのようだ

しかし、よくよく目を凝らして見てみると猿にしては大き過ぎる上、毛布のような薄茶色の体毛も生えていない

そして、ソレは代わりにきめ細かい綺麗な質を持つ極めて白に近い薄ピンクの皮膚が表面を覆っている

ただ、その皮膚は生命を喚起させる赤みがかった肌色ではなく、どちらかと言えば腐敗する前の水死体の如く血色が抜けすぎて青ざめていた気がするのだが

そう、おわかりになられただろうが、これはれっきとした人間である

否、だったと言っべきだろうか？

それを証明するのはただの前日にこの場所であつた出来事だった

「……………」

ここに、ある人物が居た

白い白衣を纏う人影は培養槽を見上げ、なにかを思案しているようにも見える

一言で表せば、その人物は美しかった

僅かに紅みを帯びた黒瞳、鼻孔、唇のラインは奇跡的なレベルで整っており古代の芸術家が大理石より削りだした伝説の神々の像の如く荘厳なイメージを見る者に抱かせる

そして日光を反射して輝く絹を連想させる白に近い銀髪
その人物の雰囲気そのものが澄んで見えのであった

このような人間は滅多に居ないだろう

よほど人生経験豊かな老人か、生涯中にかんりの仁徳を収めた聖人か、ましてやこの世の毒を知らぬ生まれただかりの無垢な赤ん坊かもしくは、自分の信じた道を如何なる手段に頼ってもひたすらに進み通す邪教の信徒か

その男とも女とも言えぬ中性的な美しさを持つ人物は極端な言葉で示すのならそのような雰囲気を身に纏っているのだった

『 P R R R R R R R 』

携帯電話のでありふれた着信音が薄暗い通路内で反響する
デフォルトのまま変更すらされてない着信音すらもこの無色の気を纏う人物には似合っているようにも思えた

人影はポケットより携帯を取り出し少し億劫そうに耳に当てる

「ロウガかい？」

電話に答えた声は限りなく中性的なソプラノ

声質から判断するにこの天使のような容貌を持つ人物は少年らしい

『 そうだ。ニル

そちらの準備は完了したか？ 』

“ ロウガ ” なる通話相手に彼 ニルが答える

「 こっちの方は大丈夫だよ

拉致した一般人の試作ゴーレムの準備はさつき終わった

調整に色々苦労したけどね」

言い終えるなり電話を持たない手を顎に軽く当ててクスリと笑う
その仕草は少女のように可憐なものだ

『そうか

では俺は監視任務を続ける
計画の実行は明後日だな？』

「うん

“浸食体”とターゲットの融合実験は二日後だよ」

ロウガが戸惑ったように尋ねた

『…お前に意見するのも気が引けるのだが
ターゲットを拉致して専用のラボでやったほうがより確実な成果が
出ないか？』

ロウガの疑問にニルはすぐさま返答する

「適合実験は野外でしたほうが沢山のデータが得られるからさ
それに僕らの“スポンサー”もいかなる環境でも適合するモノを求
めているんだ

無菌に洗浄された綺麗な研究室では発生しないイレギュラーもある
から外で実験しないと充分な結果が出ないだろ？」

『……』

「それに街中ではゴーレムや融合細胞のエサがたくさん住んでいる
今まではコソコソやってくしか無かったけど今回は自由にやってい

いらしいよ

余程、兵器として早い段階で実用化したいんだね

これは僕の提案だけど許可したのはこの国お偉方さ

仮初めの対面ってヤツもあるから渋るかと思っただけど意外とすんな

り提案が通っちゃったから拍子抜けしたさ

かなり戦争をする道具が欲しいんだろうね

それともよほど
「

同族殺しが好きなんだろうね？

言葉の後半は唇の動作だけで紡ぎ、声に出さなかった

『了解した。』

俺はお前に言われたことをただやるだけだ

異論は無い』

「ありがとう、ロウガ」

ロウガに礼を告げた後、少年は天使のように微笑んだ

電話が切れる

少年は携帯を白衣の中に仕舞って、広い通路を更に進んだ

しばらく行くと通路の中心に両脇にある培養槽と比較にならない通路の半分のスペースとほぼ同等の大きさを誇る培養槽の前に立つ

その中に入っているのは他の培養槽と同じ“ゴーレムのなり損ない”ではなかった

そこに入っているのはそれよりも小さかった赤黒い塊が毒々しい緑

の溶液の中に浮かんでいる

ニルはその肉塊を一瞥し、先程とは違った明るい微笑を見せるそれは 何かに対する期待感だろうか

そして彼は巨大な培養槽

いや、その中に浮かび脈動している醜い肉塊に向かい語りかけた

「もうすぐですよ

おそらくは姉さんも計画を嗅ぎ付けて来るでしょうから今から楽しくなります

だからあなたはそこで見守っていてください

僕達の業を」

そしてニルは培養槽に背を向けて、歩いてきた道に戻って行く

その間、彼は振り返る事はしなかった

二日目01（前書き）

話が全く進まん
まいったな

二日目 01

7月24日 喫茶店“茶々丸”

零時過ぎでとつくに営業時間を終了してるのにマスターは店の掃除をしていた

水で絞った綺麗な雑巾で二スで艶やかな茶色に塗られた木製の円板に四本の丸い木材が支えとして取り付けられた質素なデザインながら堅実な造りをしているテーブルを拭く

このテーブルは彼の“本業”が無い暇な時間にわざわざ材料を買い込んでマスター自らの手で製作されたものだ

雑巾は毎日洗った物を十枚以上用意してから、拭く度に取り替えないが使用する

マスターは客が来ないときは自ら進んでそうしていた

別に彼は極度の綺麗好きであるとか、埃を異常な程不快に感じるなどといった潔癖症も持ち合わせていない

ただし、喫茶店は客を呼び込む場所である以上最低限の手入れは行っておかなければならない

ここはあまり人が来ず、静かな逢瀬の時を過ごしたい今時珍しく慎ましき溢れる一組の大学生らしきカップルと神城空がバイトの昼休みに訪れる以外には殆ど客足は訪れない所だ

ただし、近頃は“任務”の為とは言え彼等の為に店を続けていくのも悪くないと彼は感じていた

それは、仮にこのまま何事も起きなければ。の話ではあるが静粛な時を好む彼にとって魅力的な過ごし方だと思えた

それに元々彼は争い事は好きでは無い温厚な性格をしていた

だが、今の“政府”が国民に黙って密かに行っている事を見過ごすほど世間でいわれる『腫れ物に触らず強者に媚びる賢い生き方』は選択出来なかっただけだ

いや、そんな卑屈な生き方を良識で愛すべき人間が賢いと思うのだろうか？

少なくとも彼自身はそう思えなかった

今の日本は昔のように他人の事情を汲み取れる人情ある人物は大分減ってしまったようだが、良識的な価値観をもって居るものも決していないとは限らないし、事実彼はそのような人情味溢れた者達に心当たりはある

例えば、神城空

例えば、彼の悪友らしい甲田宗

例えば…彼の“本業”の同朋達

a c t…

『ぶるるるる』

マスターの胸ポケットに収まってある携帯が振動した
バイブレーション機能に設定したのは客に気を使つての事だった
彼はテーブルを拭く手を止めて携帯を取る

携帯はストラップの付いた銀色のシンプルなデザインのもだった
ちなみにストラップは空が旅行の土産に彼にプレゼントした物である

マスターは携帯を操作した
そしてたつた今送られてきたメールを見て嘆息する

ああ。やっぱり来たかと

それは仮初めの日常への諦めであり、彼自身の“本業”への命を賭
けた覚悟と闘争へ逃れられない定めを悟つたマスター自身への自嘲
によるものかもしれない

机を拭く手が早くなる

少しくらい雑になつても店の整理整頓位は終わらせてから“準備”
に入りたかつた

もしかしたら捨てたはずの日常への執着心が残っているのかもしれない

テーブルを拭き終わり、雑巾をカウンター奥の台所の水で軽く洗い、
絞ってから干す

何度も繰り返した作業

夏場の夜とはいえ水はやけに冷たく感じる

心の中に恐怖があるのかもしれない

巨大で未だに得体の知れない“敵”に対しての畏怖を捨てきれないのかもしれない

濡れた手を備え付けのタオルで拭いながら自問する

そして彼はまだ水気が残る手でタオルをシンクの台に立てかけてから、ある場所に向かった

ドアを静かに開け、明かりを告げる

掃除すらくくに行つてない室内で充満した埃が意外と鼻につくのを彼は感じた

そこはマスター以外は誰も他人を入れたことの無い部屋だった

それもその筈だ

ここにある物を見たら一般人はマスターに対してある種の警戒心を抱かずには居られないだろうから

部屋の中には大人が持つにしてもかなり埃まみれの大きいアタッシユケースが二つほど置いてある

旅行者やよく海外に出張するビジネスマンのプラスチックと布製で製作された安物ではない、オール金属製の特性ケースだ

その一つを手に取り重たそうに床にそつと置く

そして取っ手の両脇に付いている一对の簡易ロックを外した

すぐにもう一つのケースロックも解除する

『ガチャ』

その中に有るのはマスターの道具だ

しかしそれはとても喫茶店業務の範疇で使用出来るものではなかった

黒光りするソレは死を振り撒く鋼鉄の塊

アタッシューケースの中で規則的にズリりと並べられた多種多様な銃器は蛍光灯の明かりを反射してまがまがしい鈍い光を放っていた

標準的なハンドガン、カービン銃、サブマシンガン、手榴弾

名前を挙げるならばイングラム、M4A1、グロック、コルトガバメント、エトセトラ、エトセトラ……

さながら他国のガンショップさながらの大量の火器が二つのケース内にぎっしり詰まっている

比較的銃の規制が緩いアメリカ合衆国のガンショップでもここまで品の揃えはないだろう

それこそこの量の銃器携帯は個人が猟銃一本所持するのが精一杯の日本では認められていない

その狩猟用猟銃ですら申請をした上で大量の書類にサインする必要があるのにここにある銃器の数は明らかに異常過ぎた

これは言うまでもなく非合法

発覚したならば十中八九マスターは警察に任意同行をされるだろう

では、其処までの銃器を収集して、彼は何をするつもりなのだろうか？

確かにこれだけの火器があるならばハイジャック、銀行強盗、テレビ局占拠などといった一連の犯罪行為も苦もなく実行出来る

だが、彼はそのような利己的かつ愚かななテロリズムを実行するために武器を用意したのではなかった

それは人ならざる怪物と相對するための準備

（これだけの装備

確かに人ならば充分過ぎる量だ

しかし、人の枠を超えた怪物共を相手取るとどこまで通用するかだが）

不意に昔の記憶が蘇る

異形と化したとは言え、子供を撃ったあの時の事が鮮明に

マスターは自嘲する

人間の大人は躊躇いなく殺してきたくせに化け物一匹殺すのに今更罪悪感を覚えるのか

都合の良すぎる解釈を推奨してくる良心に吐き気を覚える

しかし、どうしても銃弾を打ち込んだ子供の顔と空の顔がダブってしまう

あんな事が二度とあってはならない

だから行動を起こすべきだ

マスターは独り密かに決意した
過ちを繰り返さない為に

二日目02（前書き）

今作から少し短くなります

携帯では編集しづらいという私個人の身勝手な理由からですがご了承ください

尚、場面の分割化を計る代わりに話の密度は上げたり更新間隔を短くしたり努力致しますので今後も応援よろしくお願いします

早朝

夏とはいえ日の出たばかりの気は少々肌寒い

高度が空に近くなればなる程、地上からの放射熱から遠ざかっていくビルの上は気温が低いからだ

それが分厚い雲の影に隠れているなら同然の事である

そして、とあるビルの屋上の一角に人影は立っていた

いや、人影と呼ぶには未だに適切とは言えないかもしれない

その人影は濃紺のレインコートを纏っていた

この天気の中では不自然な格好ではある

雨除けにしては上空は分厚い積乱雲に空の青色が隠れているとは言え、雨が降るには足りないように思える

それに空の七割が雲によって覆いつくされてはいるが残りの三割の空からは青々とした霹靂が拝めた

どう考えても雨具のレインコートなど不要の長物である

だというのに

その人物はそれが同然であるかの様に自然な振る舞いを見せていた

ビルの屋上に暗い色のコートを羽織った謎の影が立っている

それはシーズン真っ盛りの怪談ネタになるくらいには異様な光景だった

「天気は悪くない。絶好とは言いが…」

ふと、人物が独り言が漏れる

低い声から察するに性別は男のようだ
しかし、それだけでかの人物の正体を推し量るには材料が足りなかった

（ニルによるとネズミが一匹張り込んで居るらしいが、果たして計画にどれほどの支障が生じるだろうか？）

彼は腕を組み黙考しているようだ

人波に紛れ込んだら決して周囲に溶け込めないであろうその姿とは意外な位、その男は物静かな空気を己が周りに放っていた

（さて、そのネズミとやら…この俺をどこまで楽しませてくれるのだろうか？）

コートの男が微かに笑った様な気がした

それは見た目では全く判らない。彼の持つ空気の変化だ

例えるならば、質素な造りの太刀が白刃を晒したとき人に与えるような危険な鋭さ

つまりは剥き出しの凶暴性、忌み嫌われる暴力の証

（実験のついでになるだろうがネズミの方とも楽しませて貰う）

男の肩が微かに震えている、恐らく笑っているのだろう

男の空気は先程の物静かな様相を既に捨てていた

いま彼の人物を纏う大気はピンと張り詰めた真冬の空気の如く、鋭く冷たい

「さて、始めるか」

男の独り言が空中に霧散する前には屋上でコートの姿は確認出来なかった

言っておくが、彼が普通に降りていった形跡は無い
ちなみに此処は、三十階建てのビルの屋上である

元々、そんな場所等には存在しなかったかのように一片の痕跡も残さずコート姿の人物は消失していた

まるで、その存在自体が幻だったかのように

二日目03（前書き）

日常描写は難しい

二日目03

神城空はマスターの喫茶店へ向かっていた

その様子は心なしか何時もより急いているように見えた

空自身、親友の甲田がマスターに会って話を聞いてみたいと言うのをいち早くマスター自身に伝えるためだ

そのため、彼はバイトの昼休みが訪れるとすぐに弁当箱を包んだ袋をひつつかんでマスターの喫茶店へ急いだのだった

途中でバイトの店長に見つかり変な顔をされたのだが強面に見えて実は人の良い彼はそれくらいの事で空を注意したり、引き止めて理由を尋ねたりはしなかった

せいぜい少しばかりは仕事中に話題に出すだろうがそれ以上の検索はしないだろう

その事は空も判っていたためにあまり気にしなかった

空自体人付き合いには中学校以来あまり無頓着になつていたために空のプライベートにあまり干渉してこない知り合いはありがたいものである

尤も、彼自身が集団行動に疲れ、変わり者である宗とばかり連むようになつたというのも一つの原因では有るのだが

彼と組めば大抵の事は娯楽になつた

例えばヒトラーは犯罪者扱いされてるのに共産主義者で長年に渡り敵対者を肅然してきた毛沢東が英雄視されるのがおかしいとか

UFOが実はドイツ軍が宇宙人の技術を使って開発した戦闘機で終

戦後アメリカ軍が摂取したとか

有史以来続いている皇族の血で血を洗うような継承者争いは未だに続いているだとか

他人が耳にすれば変な顔で苦笑されるような事を宗は明日の天気を予想するかの如く普通に言っており、空自身歴史には興味を抱いていたので、それで日が暮れるまで何度も口論したものだ

そんなときは決まって宗はこう言った

「いいか？」

俺は他人に押し付けられた見方は納豆と同じくらい嫌いだ

だから、俺は自分の目で真実を見極める努力をする

俺はあらゆるものに覆い隠されている裏側にある真を垣間見たいんだ」

宗は謔言のように口ずさむその言葉はを話すときの彼はいつものようにふざけた様子もなく、目には真剣な光を宿していた

その時の彼は同世代の誰よりも大人に見えた

その時から空は宗をなるべく手伝おうと思った

親友として

正直昨日宗と話したとき彼が昔のままの宗でいるか不安だった

しかし、彼が『真実を見たい』と口にしたときにはその懸念は霧消していた

そして、彼に協力しようと思ったのだ

昔のままに墮落せず、己の目標を見失っていない宗に彼は密か憧れたのだ

その思いを胸に彼は喫茶店へと向かった
マスターに宗と話して貰うために

彼が彼なりの真実に近付けるように

遙か昔に道を見失った自分は宗を追いかけていればきっと何か目的
が見つかるだろう

その時の為に今は全力で宗の為になるようにしたい

太陽に誰もが憧れるように、目を灼かれ、翼を溶かされながらも天
を目指したイカロスの様に

二日目03（後書き）

空「…宗」

宗「どうしたんだ？空」

空「俺…お前の事が」

宗「止めてくれ

その先は知りたくない

そんな真実知りたくない

だから止め………アッー」

二日目 04

しばらく走った末、空は喫茶店のドア前に着いた

マスターの喫茶店は今時店舗の入り口としては珍しく木製のドアを採用しており隣に置いてあるサボテンの鉢植えと共に珍妙な雰囲気醸し出している

マスター曰わく自動扉を採用する店も増えてきているらしいが彼の趣味により入り口にはドアを付けたらしい

尤もここから中が見えないお陰で何も知らない人からはいかがわしい店だと見られている事もあるという

どうでも良いような事を思い出して空は嘆息した

とりあえずマスターに話をしないと

ドアノブを開けようとする

(……………?)

鈍い真鍮色のノブに手をかけようとしたときにどこから視線を感じた

(なんだ

見られているのか?)

空は訝しげに思って辺りを見回してみたが誰も居なかった

(気のせいか)

視線なんて野良猫や鳥にも出せるものだとは強引に自分を納得させ、空は店に入った

「うーっす！」

マスターはカウンターには居なかった

（今日、留守なのかな？

でも、ドアには営業中の札が架かってたし）

その時、突然

空の近くのテーブルからトンと何かを置くような音がした
見ると普通のガラスコップ、中にはマスター特製のカフェオレが入っていた

そしてそのテーブルに座っていたのは
「マスター！」

マスターはびっくりした様子の空を見、壮年の彫りが入った精悍な顔がいたずらっ子の様に綻ろんだ

「どうしたんだい空^{くう}君

今日の君は私に何か用があるのか？」

ズバリと凶星を刺された空はあちゃーという感じで自分の頭を軽くたたいた後に答えた

「なんで判ったんですかマスター？」

マスターは曖昧に笑いながら答える

「さあね。

伊達に何十年も人間やってる訳じゃあないからね
君の考えてることはだいたい顔にでてるよ

で、用件は何だい？」

すぐに空は話し始めた

宗が昨日此処で話した連続通り魔殺人の裏に何かあると睨んでいること

彼がなるべくこの事件の概要を知りたがっていること

そんな宗に昔からの友人である自分が力になりたいということ

宗がマスターから話を聞きたがっていること

要約すればだいたいそんな事だった

全てを聞いたマスターは静かな面持ちで空に言った

「空君。

残念だけどその頼みは聞けないな」

「何故ですか？」

不思議に思つて空は尋ねる

マスターなら快く引き受けてくれると思つたからだ

「昨日はほんのさわりの部分しか君に話していない
それで諦めるもよし、このことを忘れるのも良かった」

マスターが目に見えない光を湛えて空を見る

「君は、これ以上この事に関わるのは止めた方がいい」

「それは……」

マスターがぐいつと詰め寄つて来る

それほど広いとは言えない店内で平均より高い背の彼はより大きく
見える

尋常じゃないと感じた

マスターの気迫に負ければ彼の知っている事を宗に聞かせる事が出
来なくなってしまう

空は今のマスターが怖かったが、友人の役に立てないのはもっと辛
かった

「マスター」

空はマスターの目を見た

「それでも、です。

お願いします

宗と話してください

あいつはこの事件の真相を自分で掴みたいだけなんです
だから」

マスターは鋭かった視線をいきなり緩めて、にこりと笑う

それだけでこの狭い空間の空気が軽くなったかのように空は感じた

「君は本当に友達想いだね」

空は先刻からするとマスターの雰囲気と同じく弛緩した空気に安心した

彼からは了承の言葉引き出せる

そう予感することになったものの疑いも無かった

そしてマスターの口が開き

「ダメだ

余り話したくは無かったがキミはこれ以上関わっちゃいけない」

「それはどういう

」

「こつこつ事だ」

空でもマスターでもない第三の声が場に割って入った瞬間

木製のドアが半ばから綺麗に切断され店内には真つ二つになった木片が転がり、ボタンと、音を立てた

空とマスターは同時にドアがはまっていた剥き出し入り口の見た

その音は空達以外の存在の乱入の証であり

そいつは切断され入り口近くに転がった木片を邪魔そうに蹴飛ばす
コート姿で顔まで隠した謎の不信人物だった

「よう。被験者」

そいつは全くの場違いな行動を侵しながら、空に向けて旧知の友人
のように軽く片手を振った

そして、この出来事は日常を破壊する『きっかけ』に過ぎなかった
事を空は後から思い知ることになる

二日目05（前書き）

戦闘シーン有ります

二日目05

「さて、
ショウ・タイムだ」

コート着た異様に背丈の高い男らしき乱入者が告げる

その言葉一つだけで喫茶店内の空気は奇妙な男によって支配さつつあつた

空は状況について行けなかった

なんだ、こいつは？

何で、此処に来るんだ？

どんな目的でこの場所に居るのだ？

そして、彼自身が抱いた一番の懸念は

（俺がマスターに…用が有るのか？）

あまり急な出来事に体が緊張と男の放つ異様な空気のお陰で金縛り状態にある空は眼球のみを動かして男の様子を伺う

勿論、コートの下に隠された男の素顔は見えないが、フードの奥から突き刺さってくるギラついた雰囲気から普通の穏便な目的を持っているとは思えない

ただただ、不気味な非日常だけがそこに鎮座して彼を見つめていた
すると、唐突に男が空を向いた

「お前」

「な、何だ！」

男はいきなり空に声を掛けてきたのだ
戸惑う空に男はさらに淡々と続ける

「俺達の元へと来てもらおう
尤も……」

男はマスターの方を向いた
空もつられて彼と同じく喫茶店の優しい店主に目をむける

「……そいつは抵抗したいらしい」

空はマスターの変化に気付いた
マスターはコートで今もお素顔を隠している男に対しての一分の
隙も見せずに佇んでおり、それでいて自分を遠慮なくかつ挑発的に
覗いてくる男を威嚇するように睨みつけていた
それはいつも優しく空に接してくれるマスターとは違った人物に見
えた

空の知らない顔をしたマスター

コートの人物

今現在この場でおこっている事

そのどれもが平凡すぎる日常から、危険で、世の道理が通用しない
非日常と化して空の今と化していた

喉が見えない力によって押さえつけられている気がした

息が出来ない

空気は有る

だが、空間に漂うそれは現実感を伴っておらず吸い込むことを思わず躊躇してしまうほどにマスターと男の放つ殺気に満ちていた

周りが一瞬にして空気から毒ガスに変わった気がする

吸い込んだら死ぬのではないか？

そんな錯覚すら覚えてしまう

しかし、場の重さに耐えきれずに喫茶店内に充満する無色透明の気
体を半ば無意識に吸い込んでしまう

只の空気だった

空気だと解り安心した矢先に空の喉がゴクリと音を立てた

それが合図だったかどうかの様にマスターと男は同時に動く

マスターは空の方向へ、男は右腕を振り上げてマスターへと突進する
男の右腕からは何故か三本の鋭い鍵爪が伸びていた

それが大気を切り裂きマスターへと降り降ろされる寸前にあらかじめマスターが男に向けていた手から音が出た

否、それは音と呼ぶには大きい炸裂だった

それが、連続的に発せられその都度男の体が後方へとのけぞるように震える

空はマスターの腕に握られているモノを見た

それはゲームかサバゲーの雑誌でしか見たことのないサブマシンガンだった

名前は忘れたが、昔見た映画で敵役が使っていたかのような取り回しの良さそうな小型機関銃

それが今もコート姿の男に向かって放たれている

空は再び混乱した

（マスターが何でこんな銃を？

マスターが人を撃った？

あの優しいマスターが人を殺した！）

マスターに手を掴まれどこかへと引つ張られていくのを感じながら空の脳裏には無数の驚愕と疑問が頭を飛び交っていた

そして、唐突にサブマシンガンからカチと短い音が鳴り連続していた銃声が止んだ

マスターが男がいるから入り口から反対側を指して叫んだ

「早く裏口へ！

ヤツはまだ死んではないッ！」

マスターの荒々しい雰囲気には圧倒されながら空は言われた通りにした

去り際にマスターの方を見るとマスターはサブマシンガンの弾装を慣れた手つきで交換し、再び男へと向けていた

ワンカートリッジ分の銃撃を受けながらも男はコートが多少破けているのみで対してダメージを受けているようには見えなかった

それは信じられない光景だった

自分はマスターに宗と話してくれることだけを頼みに訪れただけだったのに

こんな出来損ないの映画みたいな場面に出会すなんて全く理解できない

一気に日常が非日常に侵食を受けたみたいだ

それに、自分を狙ってくるあの男は何なのだろうか？

走りながら思考していく中で空は泡のように浮かび上がってくる疑問を打ち消し、喫茶店の裏口のドアから外に向かって駆け出した

「行ったようだな」

あれだけたくさん銃弾を体に受けたにもかかわらず、まるでダメージを感じさせない声で男はマスターに告げる

一方のマスターはに服ごと切り裂かれた胸を片手で抑えながらよるめきつつも男に銃を向けていた

そんな満身創痍な彼を見て男は鼻を鳴らす

「あのガキを庇ったのか
無駄なことを」

「無駄じゃない

少なくともお前から逃げる時間は稼いだつもりだ」

男はクク、と笑いながら言葉を返す

「どうだかね？

外には別動隊が待っている
逃れられるとは思えんな」

マスターの驚愕ぶりを見て男は満足そうに鼻を鳴らした

「済まないが、此方も必死なんだな。
色々と手を込ませて戴いた」

次の瞬間。マスターが憤慨した

「この外道！悪魔め！

お前達はあれだけの非道を犯しながらまだ実験を続けるか！」

「さあな。

俺達だって好きでやってるわけじゃないが、これで喜ぶ奴がいるんだとよ

詳しくは知らん。興味は無いし、関係無いとは言い切れないが俺も直接は関わっていないからな」

マスターはあらん限りの憎悪を滲ませ男を睨み付ける

決して少ない量の血で床を濡らしながら猛々しく敵意を噴出させるその姿はまさしく修羅にだった

男はそれを嬉しそうに眺め、さぞかし楽しそうに告げた

「さて、あんたも長くはないだろうからさっさとケリを付けるなるべく俺を楽しませてくれ」

男が人の枠を遥かに超えた速度で一瞬の内にマスターへと飛びかかった

二日目05（後書き）

機会ありましたら「国籍法改正案」で検索して下さい
あれは凄い法律です

二日目06（前書き）

現在の世の中の動きを見るに小説など呑気に書いている場合ではないのであるが…

二日目06

「ッ！」

常人から見ると信じられない速さで鋭い鍵爪が迫ってくる

完全にかかせないと悟るマスターは瞬時の判断でイングラムを前に突き出し盾にしつつ、後方へ大きく跳躍した

衝撃を逃す事で辛うじて即死の一撃を凌ぐ

だが、その代償としてイングラムの機関部には男の鍵爪が深々と突き刺さり、無残な傷を晒した

機関部の損傷は銃の機構上致命的である

イングラムが使い物にならないと判断したマスターは只の鉄塊と化なってしまったサブマシンガンを男に投擲しつつ、出血する胸の傷を庇っていた手で懷から第二の武器を抜きそのまま一瞬で男に照準を向ける

男も当然それを見逃す筈もなくマスターに致命傷を与えんと信じられない速さで直進し、一気に三メートルもの距離を詰めた

マスターの握ったベレッタ拳銃が至近距離まで迫ったコートの男の頭部付近に向けられ火を噴き

乾いた発砲音が三つ連続し店内に響いた

しかし、すんでのところで男は屈み銃弾を回避

決死の至近射撃は男の側頭部付近のコートを抉り、ズタズタにするだけの結果に終わった

コートを破られた男は己の顔にかかるボロ布の下からマスターに鋭い視線を向ける

「お前は…？」

微かに口を開き驚愕するマスターを見上げ、男がニヤリと笑ったのを見たのと同時に

マスターの腹に下方から拳が突き刺さり、重たい衝撃が彼の体を吹っ飛ばした

吹き飛ばされたマスターは周囲に血を撒き散らしつつ、椅子やテーブルを弾き飛ばし派手な音を立てながら彼のの体は壁に叩きつけられた

「よくやった、

今のは俺が人間なら間違いなく死んでいた

ただ二、三年戦闘訓練を積んだだけの奴なら最初の一撃で終わっている

並の人間では人を超えたこの身に対抗する事すら出来んのだからな

貴様。

以前に俺と似た奴と戦ったことがあるのか？」

その言葉に反応したのか服のあちこちが破け、血で赤黒く染まった満身創痍のマスターが僅か身を擦らせる

その様子を一瞥し、男はゆっくりとまるで警戒などしていないかのようにマスターの倒れている手前の地点まで歩いてきた

「そうだったな

貴様は“組織”の一員だ

だったら実験部隊とも交戦経験があるはずだ

そう言えば……」

男は何かを思い出したかのようにコートの上から顎を撫でる仕草をした後に告げた

「俺はデジタル資料でしか見たことがないが

お前

実験部隊の初期隊と交戦して全滅させた機関の部隊のひとりだろう？

なる程

だからこそ“オリジナル”に匹敵する身体能力を持つ初期型の俺を相手取ってここまで持つわけだ

……くくく」

男は嬉しそうに笑った

コートを深々と被った得体の知れない人物が体全体を震わせて低い声でくつくつと笑い声を挙げるその様はひたすら不気味としか言いようが無い

「だが、全滅させたと言っても貴様らの方も被害は甚大だったようだな

ヒトと試作ゴーレムの肉と骨があちこちに散乱し、どちらかが化物か嘗ての仲間達の死体の判別などあの混沌とした戦場を生んだのはお前だ

まさしく殺戮機械に相応しい

際限なく無残な死体を生むという観点から見れば貴様もその仲間も怪物だよ」

「…違う」

「ン？」

「わかる、判るさ

どんな姿になっても、仲間は仲間だ

私はあの部隊の一人だった

国と同規模の組織を敵に回していつ死ぬとも解らないその時でさえも恐怖や困難、苦楽そして

同じ目的を遂行する為に行動した同士達だ

どんな姿になろうとも損傷の激しい死体になっても私には判別が付いた

そして、その光景を二度と繰り返さない為にも目に焼き付けた

いや、脳裏に刻み込んだ

お前達の外道を忘れず、赦さず、打倒するためにだ」

その言葉が彼に力を授けたかのようにマスターは立ち上がった

その様はほぼ死に体になり無かったが、男を睨み付ける力強い目の輝きは少しも衰えておらず、空を逃がした時の迫力は今だ健在であった

マスターが立ち上がる間、男は手を出さなかった

それどころか満身創痍から復活した敵を目の前にして彼も闘志が沸いている

「仲間か

お前達人間の持つそれは只の口約束だと思っていたのだがな…

面白い

俺の名前はロウガ

貴様の気迫に敬意を評して全力で戦ってやる

来い」

言うと同時に男はコートを脱ぎ捨てた

白日に晒されたその異様な姿をマスターは微かに息を呑んだ

ロウガは外観からして人間では無かった

体中は黒い体毛に覆われておりそれは窓から漏れ出す日光を浴びて鈍く輝いている

腕からは先ほどマスターに切りつけた鋭い象牙色の鍵爪が三本伸びており、男の攻撃性を強調するのに一役買っている

更に目を奪われるのは男の頭部

どう見ても人間の頭ではない

狼に似たその顔は目だけがヒトと同じ明確な意志を持った光を宿している

この奇妙な、化け物としか表しようのない男の容貌はさながらエジプトのアヌビスか、伝承にて語られる狼男に酷似していた

「やはり貴様も化け物だったのか
それとも被害者なのか？」

男は微かに笑った

裂けた口から鋭い牙を覗かせながら

「それを聞いてどうする
この姿は俺であり全てだ

俺の考えはお前達の価値観や論理では理解出来ないし共有も不可能だ

来い

あの子供の仇を討ちたいのだろう？

逃げたガキを今度こそ守りたいのだろう？

ならば余計な事は考えるな」

その宣言で場は静かになった

後はお互いを殺そうとする意思のみが場に充滿している

ロウガは一メートル程ある己の腕より生えた鍵爪を構えてマスターに対し正眼に構える

そして、ロウガから一切の余裕や雑念が消失した

マスターは出血している箇所を庇いもせず、ベレッタをロウガに向け開いた手にはゴツイアーミナイフを逆手に構える

何がきっかけとなったかは知らない

只、そこにあるのは

二人が命を懸けた死闘を再開するという事実だけが在った

二日目06（後書き）

私達が今まで政治に無関心だったツケを払わされようとしている

詳しくは「国籍法 改正」で検索してください

二日目07（前書き）

日本がヤバくなっても書き続けます。

二日目07

「はぁ、はぁ、はぁ…」

空は息を切らしながら昼間の街を疾走していた

既に休まず走り続けて5分

マスターの喫茶店からはずいぶんと離れ、バイト先のスーパーをも通り過ぎた

もう少し走れば、バイト通勤用の駅が見えてくるだろう

バイトで八時間労働しているとはいえ、それでも体力的に見れば空は一般人なのだ

此処まで休まず走ったのは高校生時代のマラソン大会以来である

何も知らない道行く人が爆走する空を見て一瞬だけ奇異な視線を寄越し直ぐに視界から放す

日本人特有の面倒なモノには首を突っ込まない、なるべく保守的な特性の一つだ

仮に、この通りを歩く一般人の中で『空が何者かに追跡されている』と何者かに告げられたとしても少しばかり不快な顔を見せ、そそくさと足早に立ち去られるだろう

普通の人にとっての『日常』からの逸脱を確かに空は感じ取っていた

視界には確認出来ないが誰かが自分を尾行している

そいつはきっとプロ中のプロだ

姿どころか自身の陰すらも見せやしない

だが空は感じる

それは少しばかり勘が利く彼が下した己の判断だった

何かは分からない

怪しい人影なんて探偵ですらない自分には解らない

ただ密かに影のごとくすり寄ってくる尾行者の存在感が分かった

その信憑性は普段の空ならば気にしない位の小さな違和感

日常から微かにはみ出る非日常の匂い、感触

簡単に説明すればそんなものだ

無意識に誰でも感じ取れるが気にしないレベルの世界の歪み

彼をここまで鋭敏にしたのは空を逃がす際のマスターの言葉だった

『早く裏口へ！』

奴はまだ死んでいない！』

それはつまり逃げると言うこと

空はあの時、銃声で足が竦んでしまい動けなかった

それを叱咤激励したのがマスターだ

彼には感謝するしかない。いや、しても足りないだろう

確かに自分に出来ることは何もなかった

あの場においてもマスターの足手まといにしかならなかっただろう

しかし、あの時あの場所に止まっていたとしても、もう一つの懸念が存在する

奴はまだ死んでいない。と

これはどういった意味なのだろうか？

ゼイゼイと激しく呼吸を吐きながら彼はループする思考を纏めようとする

思考すらも脳細胞は酸素を消費させる

だから運動中にはなにも考えずに体を動かすことが望ましいと語られることを空は知識として心得ていた

だが、そんな事すらも気にせずに考えた

コートの男

男に対して殺気を剥き出しにしたマスター

平和な日本では決してお目にかかれないはずの鉄の殺人機械　サ
ブマシンガン

サブマシンガンの銃弾をまともに体で浴び、吹き飛んだ謎の男
凶行の後で空を気遣い逃げると言った何時もの優しいマスター

空には先の事件が夢であって欲しいと望む

しかし、これは悪夢にしては長すぎ、現実みに帯びていた

今は、亡霊のように自分を追跡するものから逃げるのが先だ

余計な事は後から考えれば済むことである

今空に出来ることはひたすら走り続けるしか無かった

その時だ

百メートル前方の路地から黒いワゴン車が止まるのが見えた

普段ならともかくこの状況で車の一つや二つに気を配っては入られ
ないのだが、何故か黒いワゴン車が気になった

これも直感で判断した空だが

車から降りた二人組は空の方を見た

二人は黒いコートを羽織っており、傍目から見るとかなり怪しげな
服装をした男女だった

どう鼻屑目に見ても恋人同士とかカップルには見えない

それとはもつと別の深い何かを匂わせる雰囲気が二人の間に漂っている

男の方は筋肉質そうな体つきをしておりコートがビチビチに張り裂ける程引き締まった体をしていた

女の方はモデルでかと見間違うかのような美人だった

勿論、そんな二人組など空の知り合いではない
変わり者の宗ならば何人かいそうではあるが

二人組が空の方を向く

その拍子に片方の男の視線を空の目が受け止めた

大男は空を指差しながら女と話している

此方からでは何を言っているか全く解らなかった

（こいつらがマスターの言っていた追っ手か？）

どうする？

空は自答した

コートを羽織った大男が体格の大きさに見合わない洗練された動作で人並みを掻き分け、空の方へと向かってくる

空は金縛りに逢ったように動けなかった

黒いコートを来た大男が自分を殺しに来た死神に見える

何故か映画のマトリックスを思い出した

後六十メートル

昼過ぎの大通りを流れていく群衆の中を縫って大男が近付く

後五十メートル

大男は人混みの中を泳ぐように進む

掻き分けわれた群衆はなんの抵抗も無く自分に向かって歩く男を通した

その様子はまるで泳法のようにだ

ぐいぐいと人並みを縫うようにして空の方へと向かう

空は少し恐怖を感じた

後頭部あたりの髪についた湿気がやたらと鬱陶しく感じた

後25メートル

男は既にお互いの顔がはつきりと視認出来る距離に居る

ヤバイ

と思った

何かしらあの二人組は自分に用があるらしい

空自身にあんな知り合いは居ないとするマスターと戦っていたレインコート男の言った『追っ手』としか考えられなかった

男と再び目が合った

鷹のような鋭い視線が氷槍の冷たさと鋭さを持って空を見据える

時間が停止した

少なくとも空はそう思った

しかし、実際は空が男の眼光に萎縮したのだ

男は老け顔だが、厳つい顔立ちは意外にも整っており思ったよりは若く見えた

だが、眉間に刻まれた険しい皺とへの字に閉じられた口が全てを台無しにして男に威圧感を漂わせている

空は本能的に恐怖を悟った

（殺されるのか？俺は）

だが足が動かない

空は男の眼光をモロに受けているせいか、動かすべきアキレス腱がすっかり竦んでいた

まるで蛇に睨まれた蛙のようだ

男が歩きながら自然な動きで懷から何かを取り出した

それは喫茶店でさつき空が見たものに酷似していた

銃だ

その銃口から除く闇が真っ直ぐ空の方向に向けられている

周りの人間は気にした様子もない

まるで男の姿が見えていないようでもあるし、男の雰囲気は雑踏の人々からはあまりにも異質過ぎて無意識の内に認識の外へと排除しようとしているかのようなだった

引き金に男が指を掛ける

ガチリ。という殺人機械にしてはやけに軽い鉄同士が接触するような軽い音が聞こえた気がした

その時、空は駆けた

そして銃口から螺旋の軌跡を空気中に描きながら弾丸が発射される

空には意外と発砲音は小さく聞こえた

先のサブマシンガンより銃声が小さいというのも一つの原因であるかもしれないが

しかし、その銃声は昼過ぎの通りを自分勝手に歩く雑踏を散らすには十分に過ぎた

場に混乱が訪れる中で空の姿をそこでは確認出来なかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7338e/>

国家主導非人道的実験

2010年10月28日05時39分発行